

# ひめまつ

67



宇都宮短期大学附属高等学校生徒会

ひめまつ  
目次  
第六十七号

表紙……石崎朝子 題字……石川木魚 写真……写真部・編集委員会  
校歌 生活目標

グラフ 「学園の四季」

随想 未来を育む<sup>はぐく</sup>全人教育「私の生きた<sup>とき</sup>刻」雑感…… 校長 須賀 淳 …… 1

論説 『僕らが育った時代』を出版して…… 副校長 須賀 英之 …… 4

特集1 生活教養科・活動報告 …… 7  
手作りのエプロン寄贈／第四回イタリア海外研修旅行に参加して

特集2 調理科・活動報告 …… 9  
第十三回調理科フランス海外研修旅行で学んだこと／大使館ウィークラミエールレセプションで、  
各国大使のお食事を担当／ヤオハン宇都宮店で、地産地消手作りパン販売  
ファミリーマートとの共同開発による新商品（おむすびとお弁当）発売

特集3 インターアクトクラブ・活動報告 …… 13  
足尾植樹／台湾研修旅行

真剣に取り組む

最後の合唱コンクール

空は飛べた

ハーモニーで繋ぐ絆

三年 三組 松村

茉莉

三年 十四組 稲毛

匠

二年 三組 佐藤

聖佳

一年 一組 松本

佳純

平成二十四年度 校内読書感想文コンクール入賞者

心に強く響くもの … 校内読書感想文コンクール入賞作品 …

【第三学年の部】校長賞

第一位 村上 春樹著「羊をめぐる冒険」を読んで

三年 三組 津久井 玲人

第二位 安部 公房著「棒」を読んで

三年 三組 森 紗智子

第三位 朽木 祥著「オン・ザ・ライン」を読んで

三年 一組 八幡 詩織

【第二学年の部】校長賞

第一位 坂本 司著「青空の卵」を読んで

二年 一組 仁科 薫

第二位 若宮 清著「中国人の99・99%は日本人が嫌い」を読んで

二年 四組 岩崎 光志

第三位 ヘミングウェイ著「老人と海」を読んで

二年 十一組 上澤 加奈

【第一学年の部】校長賞

第一位 中山 七里著「さよなら ドビュッシー」を読んで

一年 六組 井村 香央里

第二位 重松 清著「青い鳥」を読んで

一年 一組 手塚 麻結

第三位 石田 衣良著「約束」を読んで

一年 六組 渡辺 紗里奈

各種コンクール入賞作品

【心の輪を広げる体験作文】

最優秀賞 見えなくても見えている

【人権に関する作文】

最優秀賞 心の目を信じて……

【高校生のキャリア生活文コンテスト】

佳作 過去の私と今の私

【全国高校生ケータイ韻文コンテスト】

俳句部門 最優秀賞

俳句部門 優秀賞

【第九十五回全国高校野球選手権記念大会キャッチフレーズコンクール】

優秀賞

【河野裕子短歌賞「青春の歌」】

NHK出版賞

二年 十五組 小室 孝輔

一年 六組 渡辺 紗里奈

三年 三組 田中 奈々

三年 十二組 武藤 黎

一年 三組 新井 なつみ

一年 二組 町田 元

一年 十組 樺澤 広之

あとらんだむ 生徒作品集

【一年間の反省と二年生になる抱負】

旧・一年 一組 戸松 亮  
旧・一年 二十組 佐久間 海

【二年間の反省と最上級生になる抱負】

旧・二年 四組 荒川 ひかる

【詩】

三年 十二組 金子 珠希

三年 十四組 荒山 佳久

一年 十組 鈴木 俊人

一年 十三組 吉田 萌恵

【社会への提言】 《普通科応用文理コース三年十一組》

- 少子・高齢化社会に向けて
- 少子高齢化について
- 「栃木県の街づくり」について
- 「いじめ・虐待問題を考える」
- 「少子・高齢化社会の到来」
- 「傾聴」のすすめ

旅行記

- 沖繩の記憶
- 紅型に染めた沖繩の思い出
- 東大つてどうだい
- 一日旅行での発見
- 思い出に残る一日旅行
- 古代の遺跡を垣間見る
- 絆を深める一日旅行

わがホームルームの紹介

三年・二年・一年

委員会・部活動報告

風紀交通安全・図書・美化・茶道・華道・理科・服飾手芸・囲碁将棋・弓道・演劇・写真・プラスバンド・合唱・  
 硬式野球・女子サッカー・男子サッカー・卓球・水泳・女子バレー・男子バレー・硬式テニス・男子ソフトテニス・  
 女子ソフトテニス・バドミントン・男子バスケット・女子バスケット・柔道・剣道

学園告知板

附属中コーナ― ..... 90

この一年間のおもな活躍・クラス紹介・行事紹介・作品集コンクール入賞作品・写真で見る中学校生活

宇都宮共和大学・宇都宮短期大学コーナ― ..... 110

宇都宮共和大学 シティライフ学部／イベント・シンポジウム・卒業生からのメッセージ  
宇都宮共和大学 子ども生活学部／公開講座・就学支援・スカラシップ・卒業生からのメッセージ  
宇都宮短期大学 人間福祉学科

教育実習生、母校の教壇に ..... 126

保健体育科 東京女子体育大学 藤原 麗華  
音楽科 宇都宮短期大学 植木麻優子  
音楽科 宇都宮短期大学 青木 千紘

平成二十四年度生徒会報告 ..... 130

主な大学合格者数一覧(過去三年間) 主な就職内定状況(平成二十四年度) ..... 136

編集後記 ..... 138  
編集委員長・安納 佳苗

校史と校章



# 学園の四季

入学式

H24.4



誓いの言葉～期待に胸が膨らみます～



新入生～高校生活のはじまり～

生徒総会

H24.5



より良い学校を目指して

スポーツ  
フェスティバル

H24.6



男子バスケット



卓球



～心ひとつに～

合唱  
コンクール

H24.7



美しいハーモニーの響き



# Dream&Hope ～夢と希望を乗せて～

創立  
112周年記念  
学校祭  
H24.11

須賀学園創立112周年を記念した中学・高校合同の学校祭が創立記念日の11月10日に大勢のお客様をお迎えし、本学園教育会館と須賀栄子記念講堂大ホールにて盛大に行われました。

各科、各クラス、各部ごとに日頃の勉強や練習の成果を披露するとともに絆を深める1日となったようです。



オープニングセレモニー(プラスバンドの演奏)



大勢のお客様でにぎわう模擬店



エコについて調べました(クラス展示)



たくさんの品物が集まりました(生徒会バザー)







オペレッタ上演(音楽科)



アカペラコンサート(野外ステージ)



ファッションショー(生活教養科)



調理科による卒業製作展示







郷土料理



三線



紅型



エイサー



サトウキビ収穫



やちむん

# 修学旅行 in 沖縄 H24.12

本格的な冬を前に、2年生は修学旅行に  
出発。現地では、12月とは思えない温  
暖な気候の中で、さまざまな体験を通  
して、友情を深めてきました。



沖縄の海をバックに



琉球村



ひめゆりの塔にて献花



美ら海水族館 一大迫力のジンベイザメ



国際通りでの自由行動



世界遺産 首里城にて

## 随想

# 未来を育む<sup>はぐく</sup>全人教育 「私の生きた刻<sup>とき</sup>」雑感



昨年九月に、下野新聞社から”未来を育む<sup>はぐく</sup>全人教育  
「私の生きた刻<sup>とき</sup>」”が出版されました。この私の著書  
は、下野新聞紙上に半年間にわたって毎土曜日に連載  
された「私の生きた刻」というシリーズ記事を単行本

校長 須賀 淳<sup>あつし</sup>

にしたものです。その内容は、私の物語であると同時に、明治・大正・昭和・平成と百十余年にわたる須賀学園の歴史であり、さらには日本の近代教育史でもあります。

この本は、本校生徒の皆さんには、創立者須賀栄子先生の御命日の十月十四日に差し上げましたので、生徒の皆さんはもちろん御家族の方々にも読んでいただくことと思います。下野新聞の「読書」というページには、東京と宇都宮における新刊本のベストセラーが発表になりますが、九月三十日付けの下野新聞では、この私の本が宇都宮の書店調べで、ベスト・テンに入っていました。県内の多くの方々書店で購入して読んでくださったものと思われ、大変うれしく思いました。



ところで、この「私の生きた刻」には、私の八十余年の人生が語られているわけですが、私が物心ついてから昭和二十年の満二十歳までの、戦前・戦中の出来事が特に濃密に心に重く残っています。それに比べて戦後の六十余年の平和な日々は、坦々としてあつという間のような気がします。このことは戦争というものが私の人生にとっていかに大きな出来事であったかを物語っています。

私が小学校一年に入学した昭和六年の九月に満州事



変が始まり、中学一年の七月には支那事変（日中戦争）に拡大し、ついに昭和十六年十二月八日にはアメリカ、イギリス等の世界の大国を相手とする太平洋戦争に突入したのです。日本の敗色が濃くなった昭和十八年には、われわれ文科系の学生たちは、学業途中で祖国を守るためにペンを捨てて銃をとることとなったのです。いわゆる学徒出陣です。

当時私は旧制高校の生徒でしたが、特別甲種幹部候補生を志願して陸軍に入隊しました。その軍隊の中で東大の合格通知を受け取りましたが、私たちは本土決戦に備えて、爆雷を抱いて敵戦車に飛び込む対戦車肉薄攻撃（「肉攻」といいました。）の訓練を受けており、生きて再び学窓に戻れるとは、誰も考えていませんでした。

現在の若い人々にとって、太平洋戦争は遠い過去の出来事となっており、近現代の日本の歴史には興味と関心が薄い人も多いようです。高等学校の学習指導要領では、世界史は必修となっていますが、日本史は依然として選択科目のままです。最近読んだ教育雑誌に「難関大学といわれる大学の、しかも文科系の院生にさえ、赤穂浪士と新撰組を区別できない人がいる。それが現代日本人の知識や教養の現実である。」と書い

てあったのでびっくりしました。それどころではありません。あの太平洋戦争で日本はどの国と戦ったのかさえ満足に答えられない人が多いのです。大学で日本経済史や日本教育史の講義を始めるには、中学校の歴史教科書を読み直してからでなくてはなりません。といつても本校では日本史は必修となっていますから、本校の生徒の皆さんは大丈夫です。

日本の国民は、平和憲法のおかげで戦後七十年の間、平和を享受しています。日本には軍隊はないので、徴兵もない。そして戦争はしないという平和国家です。一昨年NHKテレビで「証言記録・太平洋戦争七十年―戦争を語り継ぐ」という連続番組を放送していましたが、テレビで見る限り、語り継ぐ老人の多くは、高齢のためしゃべる言葉もおぼつかなく、これでは次の戦後八十年の記念番組は成り立たないことは確実だろうと思いました。

第二次安倍内閣が国民の期待をになって発足しましたが、尖閣諸島の問題やアルジェリア人質事件など、平和国家日本にとって大変心配なことが起こっています。本校生徒の皆さん、ときどきはお手許の「私の生きた刻」を読み返して、日本の平和と安全について考えてみてください。

「私の生きた刻」未来を育む全人教育に寄せて

「私の生きた刻」は下野新聞の土曜日付け総合社会面に掲載されている大型企画で、教育、政治、文化、スポーツなど各分野で一時代を築いた方々に「わが人生」を語っていただいています。興味深い読み物であると同時に、本県を代表する人物の歴史的資料として、読者からの反響も大きい連載企画です。

平成二十四年四月からは、須賀学園理事長の須賀淳先生にご登場いただきました。須賀先生は学園の理事長として私学振興に尽力されるときともに、本県の音楽文化発展に多大の貢献をされました。

約六カ月にわたり、ほぼ毎週金曜日に二時間、テーマを決めてお話しいただき、原稿の形に構成しました。その内容は、戦前、戦中、戦後の激動期に教育一筋に生きた須賀先生の物語であると同時に、体験的な日本教育史ともいべきものでした。

弊社の依頼に応じて、長時間にわたり快くお話をお聞かせくださった須賀先生に、深い感謝と敬意の念を感じております。私が須賀先生との会話の中で感じた感動、喜び、驚きが、この本を通じてより多くの人々の心に届けばと願っています。

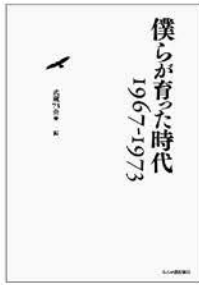
平成二十四年九月

下野新聞社 編集局くらし文化部

杉山 演

## 論説

# 『僕らが育った時代』を出版して



「**中学高校が人生に与えたもの**」をテーマに

昨年末、私立の中高一貫校を卒業した同期生で、『僕らが育った時代1967～1973』という単行

副校長 須賀英之

本を出版しました。演劇評論家や大手新聞社の元局長を中心に、建築家、駐欧大使、尺八演奏家など異業種の仲間が編集委員を務めたこともあり、執筆者は東大教授、日銀理事、医師から外資系企業役員、CAFÉの経営者まで様々です。数年後に還暦を迎える世代ですが、現在は、元気に第一線で活躍しています。

本の内容を一言でいえば、中学高校時代の教育と社会情勢が、人生にどのような影響を与えたかを振り返って評価し、さらに残りの人生にどう生かすか、ということを考えてみようというものです。単なる自費出版の回想録とはせずに、広く世の中に発信するという目的から、一般の出版社から一冊二千元で刊行してもらいましたが、先日、大手書店の社会思想史の棚に陳列されていることを発見して、ほっとしたところで



## 「あみだくじ」の授業から大学教授に

読み返してみると、社会に出てから、ビジネスマン、官僚、研究者、エンジニア、芸術家などと、それぞれ進んだ道は異なっても、六年間一緒に過ごした先生方から皆が多大な影響を受けていたことがわかります。

中学一年の時に、校長先生から「あみだくじ」を題材にした授業を受け、それが「高尚な数学の学問にながっている」と気付いたことをきっかけに理系に進み、大学教授になった同級生もいます。

授業中に先生から、「中学三年生になるまでに、自分が将来、何になるのか決めておきなさい。」と言われ、急に具体的な進路を考え始めたことや、「敵多くして君子戦わず」といった孫子の兵法を人生訓として教えてもらったことなど、何人もの同級生が、こうした四十五年も前の先生の一言を鮮明に覚えていることに、驚きの連続でした。

担任だった先生へのインタビュー記事で、「私たち生徒のことをどう思っていたのですか？」という質問に対して、「正面から付き合いたかった。教師と生徒という意識はなかったな。人と対する時は真面目だったから。」と答えていらっしやいます。先生方は、自分の人生観や信念を、多感な時代の私たちに熱く語ってくれたのです。先生方が、社会で活躍できるための人生の栄養を愛情を持って与え、人間としての基礎的な力量を育んでくれたものと、あらためて感謝の念に

絶えません。

## コペル君に共感

もう一つ、大きな発見がありました。それは、高校で出会った本が、進路の選択に大きな示唆を与えたことです。たとえば、中学入学後すぐに社会科の授業で、『君たちはどう生きるか』（吉野源三郎）を読みました。中学生の主人公コペル君が、同級生四人とかわりながら、精神的な成長を遂げ、社会の中でどう自分の人生を切り開いていくか。その精神的な彷徨を描いたものです。この本は、1937年に、日中戦争の暗い時代背景を憂いた山本有三が企画した、『日本少国民文庫』の最終巻として刊行されたもので、今でも文庫本として本校の図書館で手に取ることができます。

文中の叔父さんの言葉に、「もしも君が、学校でこう教えられ、世間でもそれが立派なこととして通っているからといって、ただそれだけで、いわれたとおりに行動し、教えられたとおりに生きてゆこうとするならば、それじゃあ、君はいつまでたっても一人前の人間になれないんだ。君自身がまず、人間の立派さがどこにあるのか、それを本当に君の魂で知ることだ。」という一節がありますが、それは、「自ら調べ自ら考える」という学校の教育の理想として、私たちの人生の指針として息づいています。



初版本 新潮社



現在の文庫本  
岩波書店

また、中学の国語では、『夢十夜』（夏目漱石）や『檸檬』（梶井基次郎）を、高校の漢文の授業では、最初は『論語』、そのあと『老子・莊子』を読まされました。その際、先生からは、「若いうちは孔子や孟子の儒学を学んで人生に生かすことがよいが、年を取ってきたら老荘思想を読み返すことがよい。」と言われた記憶があります。

また、『楡家の人々』（北杜夫）、『激流』（高見順）、『現代政治の思想と行動』（丸山眞男）など、様々なジャンルの本を授業で読む機会を得ました。時には、小説の意味や先生の意図が全く理解できませんでした。その後の人生で、先生はこういうことを伝えなかったのだ、とはっと思い出し、納得することがしばしばあります。

## 半世紀にわたる課題

高校の卒業式で、私たちの代表は答辞として、こう述べました。「自分たちにとって高校とは何であったか、高校にとって自分たちとは何であったか。それは、

けっして現時点で結論付けられるものではなく、あくまでも、これからの自分たち、これからの君たち（後輩）にかかっていくことであると思う。」と。私たちは、この言葉を卒業してから半世紀にわたり、自らの課題として問い続けています。

あれから時代は移り、教育へのニーズは複雑化し、社会はグローバルな枠組みへと変化しています。しかし、私は教育には変わらない本質があると信じています。

一人ひとりの持つて生まれた優れた個性・能力・特性を最大限に伸ばす全人教育の理念。そして、自分自身の価値を大切に、また相手の価値も尊重する「一人は一校を代表する」という生活目標。これらは、本校創立以来、一世紀以上、受け継がれています。

生徒の皆さんには、ぜひ将来にわたって拠って立つ、しっかりとした基盤を本校で培ってください。そのために、一日一日を大切に、特に先生や同級生との人間的なふれあいを大切にしてほしいと願っています。

この本の出版を通じて、「いかに中学高校時代が、人格形成に大切か」ということを再認識して、私自身、本校での責任の重さを改めて感じています。

皆さんも、本校で何を学ぶのか、学問を身につける意義とは何か、ということを深く考えて、これからも有意義な学校生活を送ることを期待しています。

# 特集

## 1

### 生活教養科

### 活動報告

#### 手作りのエプロン寄贈

本校創立者である須賀栄子先生の命日にちなんだ「やさしい心づかい運動」の一環で、生活教養科の生徒が製作した手作りエプロン七十二枚を宇都宮市役所に寄贈しました。今年で二十四回目の行事で、来夏に保育園などで体験実習を行う、二年生が製作を担当しました。毎年、保育園実習などでお世話になる皆様に感謝の気持ちを含めて、子ども部長の高橋利幸さんに手渡ししました。



#### 第四回イタリア海外研修旅行に参加して

■期間：平成二十四年二月六日～十二日  
■参加者：二十五名 ■引率：八木 幸恵先生

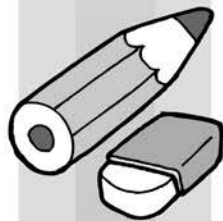
二年一七組 河合 清美

成田空港からイタリアまでの空の旅は約十三時間、「疲れるだろうな」という私の心配は全く無用のものでした。初めて訪れるイタリアという国に対する憧れと期待が、飛行機中で過ごす退屈な時間さえ、うきうきとした貴重な時間に変えてくれたようです。

この研修は、生活教養科と普通科応用文理コースが隔年で実施しているものです。今回で第四回目。先輩方からお聞きして、入学した時から参加したいと思っていた研修です。やっとその時を迎えることができました。

最初の訪問地、ミラノの空港に降り立った時、目に飛び込んできたのは道路のあちこちにある大雪の名残りです。北から来る大寒波に迎えられるのが研修旅行スタートとなりました。

デザイン学校研修、スローフード体験、伝統工芸実習など様々なプログラムがあり、学び取ったことを述べたら、原稿用紙の二枚や三枚では足りません。心に深く残った二つのことだけ、書くことにします。一つ目は、一昨年の東日本大震災の折、ミラノ大聖堂では多くのカトリック信者たちが、日本の犠牲者のために追悼のミサを開いてくれたということです。日本式のお焼香をおこなってくれたというお話を





う、貴重な経験をする事ができました。  
 私は、この研修で、ファッションやフードなど、日ごろ学んでいることを深められたことはもちろんですが、イタリアの文化と伝統の素晴らしさ、古きを守りながら新しいことを追及していくイタリア人の愛国心、自分の国に誇りを持って生きている彼らに、大きな尊敬の念をいただきました。今までここにいないことが当たり前のように暮らしてきた私ですが、改めて自分自身を見つめる事ができました。私が生まれ育ったこの日本を愛し、受け継がれてきた文化を守っていきたくて強く思いました。まずは、今できることをしっかりとやって、一日一日を大切に頑張っていこうと思っています。



▲ミラノ ドゥオモ

聞き、多くの人たちの篤い応援を受け止めるとともに、イタリアの人々に深い親密感を感じました。  
 二つ目は、イタリアの街や教会を彩るステンドグラスや古い絵画は、その一つ一つに大きな意味があるということです。事前研修である程度は知っていましたが、現地でその迫力に圧倒され、またそれらにまつわる話を聞くたびに、何百年の時間を超えて、人々が歩んできた喜びや苦しみの日々を、自分がこれまで生きてきた短い時間と重ね合わせて考えてみるとい



▲ローマ 現地学生との交流



▲フィレンツェ スローフード研修

「第十三回調理科フランス」

海外研修旅行で学んだこと

調理科一年（現二年）

立谷 葉奈

私は、平成二十四年二月七日から二月十三日までの七日間、今までの人生の中で最も貴重な体験をしました。調理科に入学する以前から一度は行ってみたかったフランス。仲の良い同級生や先輩方と、フランス海外研修旅行に参加できるときまった時は、嬉しさと、期待に胸躍らせていました。私の一生の宝物となったフランスでの充実した七日間を、一日ずつまとめていきたいと思います。

一日目は、ほとんど日本からフランスへの移動です。飛行機の中では、十三時間も過ごしました。初めての海外旅行でしたのでとても緊張しましたが、ロシア人のCAが優しく声をかけてくださり、写真を一緒に撮ったり、ロシア上空を通過した時は、お国の説明をしてくれたりして飛行機での長旅もとても楽しく過ごすことができました。そして、ついにフランスのシャルルドゴール空港に到着。期待でいっぱいのまま飛行機から降り、周りを見渡すとどこを見ても外国人ばかりで、ついにフランスに来たなと感じました。重いスーツケースを押しながらバスに向かって歩いてみると、フランス人から話しかけられたり、珍しそうに見られたりと、ここでは自分達が外国人なんだと感じました。フランスのバスは、車高が高く座席の位置が高かったりと国によってバスの造りも違っているんだと思いました。夕食を買った



▲エコール・オテリアル・ド・アヴィニオンにて

めスーパーに行くこと、普通のスーパーですが、商品はメイド・イン・フランスだと思ったり楽しくなっていました。どの食品もおいしうでした。機内食でお腹がいっぱいなのに、ついついサンドウィッチを二種類買ってしまいました。ホテルの部屋で、友達と半分ずつにして食べました。日本にはない味で、これがフランスの味なんだなど感銘をうけました。そして、疲れをとろうとユニットバスのお風呂に入ると、シャワーの出し方が分からなくて戸惑うなど全てが初体験の一日でした。私たちの宿泊したホテル、メルキュール・パリ・ガールド・リヨンはとてもサービスの行き届いたホテル





で、ベットもふかふかでぐっすり寝ることができ、初日の長旅の疲れを癒してくれました。

二日目は、朝食にフランスでの初フランスパンを食べました。日本のもとは比物にならないくらいおいしかったです。朝食終了後、ホテルを出てリヨンに向かうため、パリ・リヨン駅に向かいました。日本ではあまり見かけないスリが多いと聞き、バックは抱えるように持っていないといけないと注意を受けました。フランスの新幹線TGVに乗り、あっという間にリヨン駅に到着。一つ星レストラン「TELEDOIE」に向かいました。出てくる料理はどれも見た目が華やかで、繊細で、味は日本のフランス料理とは全く違って、これが本場の味なんだと思いました。デザートはチョコのケーキとレモンのシャーベットがとてもおいしかったです。食事には二時間以上



▲アヴィニヨ市内サンベネゼ橋にて

かかりましたが、さすがに食事をすることを大切にしている国だなと思いました。次に、ノートルダム寺院に行きました。外観がとても美しく、華麗でした。寺院の中に入ると日本語版のパンフレットがあり、それを見ながら見学するとリヨンの街の歴史を理解することができました。その後、楽しみにしていたショッピングモールでの買い物に行きました。店の広さに驚き、店員さんはレジをイスに座って打ったり、ここでも日本とのいろいろな違いを発見できました。そして夜は、研修先ホテル学校近くのホテル

キリアッド・アヴィニヨン・カップ・スツッドに泊まり疲れをとりました。三日目は、一番楽しみにしていたホテル学校での研修でした。ウェルカムパーティーでおいしいクロワッサンとジュースを頂いていると、フランス語で書かれたルセット(レシピ)が配布されました。とてもワクワクしてきました。調理実習では私は前菜を担当しました。調理方法が違ったり、言語の壁があり戸惑いもありましたが、ジェスチャーや英語を駆使して、担当の先生に自分たちの意思を伝えて、料理をしていきました。プロヴァンス料理は、星付きレストランよりも味が薄くて食べやすかったです。お腹がいっぱいになった昼食後は、世界遺産にも登録されているアヴィニヨ市内見学です。法王庁、ロシエドン公園、サンベネゼ橋、旧市街地に行きました。法王庁では、あのマリーアントワネットが手を振ったといわれている窓から外を眺めたり、中世ヨーロッパの歴史に触れることができて、とても勉強になりました。ロシエドン公園では街を一望できました。とても綺麗な街並でした。サンベネゼ橋は、昔は二十二連のアーチ橋だったのが、長年の風雪や川の氾濫などで橋の一部が流されて、今は四連のアーチ橋になってしまったと聞いていましたが、見てみると、本当に途中で途切れていて、これは実際に見ないと分からないなと思いました。旧市街地は、この地の名物、アルプス山脈から吹きおろすミストラルという強風のためお店が二軒しか開いていなくて残念でした。夕食は、一つ星レストランの「クリスチャン・エチエンヌ」です。本校調理科の先輩が働いていたこともあり、とても親切に接してくれました。お料理もハイセンスで、うずらの料理がとても食べやすく、品がある感じがしました。

四日目は、学校での研修の二日目です。初日は緊張と不安がありましたが、雰囲気にも慣れて楽しんで料理を作ることができました。フランスの生徒とも英語で少しですが会話をしたりして、料理を作るだけではなくて交流することも大切だなと思いました。あっという間に研修の時間が終了してしまいましたが、最後にシェフと撮った記念写真には私にとって大切なものになりました。その後私たちはTGVに乗って、パリに戻りました。夕食は久しぶりの和食です。日本では普通に食べている味噌汁がとてもおいしく感じ、日本が少し恋しくなりました。



五日目は、楽しい日程でいっぱいでした。教科書の中で見てきたベルサイユ宮殿、ルーブル美術館を訪れました。ベルサイユ宮殿では、ルイ十四世、ルイ十六世、マリーアントワネットの寝室や食事室、そして鏡の間を見ました。鏡の間は、想像していた以上に広く、とても綺麗でした。数々の歴史が作られた場所にいる私がとても不思議でした。ルーブル美術館では、世界史の教科書で勉強したナポレオンやジャンヌダルク、モナリザの絵を見ました。やはり本物は、迫力のある絵でした。昼食は、ルーブル美術館地下にあるフードコートのマクドナルドで食べました。言葉がなかなか通じなくて注文することが大変でしたが、自分たちだけでハンバーガーを買った時の達成感はないものにも替えられませんでした。その後、レアル地区と凱旋門見学。レアル地区では、日本には無い調理器具がたくさんあり、さすが本場は違うなと感じました。凱旋門では、螺旋階段を登り、階上からパリの全景を眺め、放射線状の道路の先には、シャンゼリゼ、コンコルド広場、ルーブル美術館そしてサクレ・クール寺院、エッフェル塔。私の手が届くかのようにパリの街がありました。そして、フランス最後の夜をレストラン「レ・ゾンブル」でエッフェル塔を間近に見ながら楽しみました。高校生が食事ができるようなレストランではなく高級感たっぷりのレストランで、本場のフレンチを堪能しました。料理を待っている間、窓から見えるエッフェル塔のイルミネーションが輝きだして、とてもロマンチックな夕食となりました。

そして、フランス最終日はエッフェル塔です。塔からのパリの風景を私の目に焼き付けました。その後、ノートルダム寺院へ。日曜日のミサの最中でした。クリスマスチャンではない私でも、とても厳かで体験したことのない雰囲気を感じました。このバラ窓のステンドグラスはとても綺麗で歴史の重みも感じ感動しました。そして、いよいよ世界一の「カフェ・フーケ」でのランチです。映画「凱旋門」で有名になり、赤い屋根で有名なカフェ。しかも二階の高級レストランで食事なんて、普通の高校生では体験出来ない事を経験させて頂きました。まだ未熟な私の舌ではフォアグラはおいしいとは思えませんが、おいしいと思える年齢になった時にもう一度来店したいと思いました。ランチも終わり、バスが空港に向かって走り出しました。旅行の当初はホームシックになったり、日本が恋しくなったりしましたが、その

時はずっともつとフランスにいて色々学びたいと思いました。空港に着き名残惜しさを感じながらも飛行機に乗り、日本に向かいました。行ききのハイテンションはどこかへ消え、ぐっすり眠り、目覚めて機内食を食べたらもう日本まであとわずかでした。成田空港に着き周りを見渡すと日本人がたくさんいて、日本に帰ってきたのだと感じました。学校に到着し、両親や先生の顔を見るとホッとしました。フランスでは、楽しくても慣れない土地であるために緊張をしていたんだなと思いました。

これらのように、私にとって、この七日間はとても充実したもので、毎日が感動の連続でした。日本では体験できなかったこと、日本とフランスの文化の違い、習慣の違い、本場フランス料理の味付けや盛り付けのセンスなどを学ぶことができました。私は、将来料理を通じて海外と関わりたと思っていますが、このフランス研修でより一層その思いが強くなりました。その夢を叶えるためにも世界で多く使われている英語をもっと勉強して語学力をつけていきたいと思っています。今は、調理科での高校生活を充実させていくことが大切です。次は、自分の力でフランスに行つて、もっともっと勉強してみたいと思っています。このような素晴らしい研修旅行を体験させてくださった両親、そして先生方に感謝しています。



▲エッフェル塔にて



大使館ウィーク・コミニケーションで、各国大使のお食事を担当

日光市では、原発事故の風評被害により観光客が減少していることから、安全安心を国内外に発信することを目的に、フランス・中国・韓国の三大大使館の協力のもと、「大使館ウィーク in Nikko (ガンバレ日光)」と題して、演奏会・絵画展・映画上映などの文化行事を開催しました。昨年九月二十二日(土)、今市文化会館で開催されたオープニング式典のレセプションで、本校調理科の生徒が、栃木県産食材を使用したフランス・中国・韓国各国の料理を作り、各国大使に召し上がっていただきました。



やしお鱈と大根のマリネにフランス大使は「トレボン！」

ヤオハン宇都宮店で、地産地消手作りパン販売



昨年六月から毎月一回、ヤオハン宇都宮店にて、仕入れから製造、販売まで生徒手作りの店舗運営により、焼き立て地産地消パンの販売をしています。栃木県産小麦粉(ゆめかおり)と日光の銘水(片山酒造仕込み水)で生地を作り、旬の栃木県産野菜を使用して、フランス風食パンと季節の味を取り入れた総菜パンです。毎回、長蛇の列が出来てすぐに完売するほどの好評を博しています。

ファミリーマートとの共同開発による

新商品(おむすびとお弁当)発売

本校調理科生徒は、ファミリーマート商品本部から直接、「売れる商品の開発と販売戦略」など最先端のマーケティングを学習しています。昨年十一月九日(金)、調理科とファミリーマートとの共同開発による「おむすびとお弁当」が、北関東を中心にファミリーマート約六百店舗で発売されました。



左/愛情むすび かんびょう鶏そぼろを考案した 平原 久美さん(陽北中出身)  
右/さつぱり 青ジソース餃子弁当を考案した 岡原 佳奈さん(南河内第二中出身)

●さつぱり 青ジソース餃子弁当 498円

このお弁当は「宇都宮餃子消費量日本一奪還」の気持ちを含めて、岡原佳奈さん(南河内第二中出身)が考案しました。決め手は、青じそのさつぱりしたソースです。



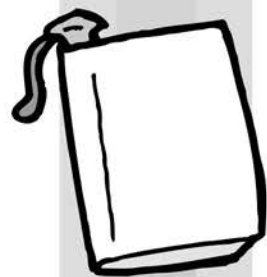
●愛情むすび かんびょう鶏そぼろ 118円

かんびょう鶏そぼろを甘辛く煮込んで具材とした美味しいおむすびを、平原久美さん(陽北中出身)が完成させました。



## 特集 3

# インターアクトクラブ 活動報告



インターアクトクラブ会長  
三年 十組 小林 菜麻

私たち宇都宮短期大学附属高等学校インターアクトクラブは一年生二十一名、二年生二十二名、三年生十三名 合計五十六名で活動しています。

私たちの一年は、足尾の植樹に始まります。足尾の植樹デーではなく、宇都宮西ロータリークラブ独自の日程で植樹を行っており、昨年は五月二十日の新緑がきれいな時期に行いました。苗木は、学校祭でマシュマロフレックとジューズを販売した売上などで買っています。毎年宇都宮西ロータリークラブの皆様とコナラやイタヤカエデなど約



▲足尾植樹

三百本の苗木を準備して植えています。十一月には系列校である宇都宮共和大学の学校祭で開催される留学生のスピーチコンテストを参観し、その後は留学生との懇談会を行いました。学校祭ということもあり、和やかな雰囲気の中で親睦を深めることができました。国際交流の機会は貴重なものなので、毎年楽しみにしています。

三月には、私たち三年生は卒業ですが、一年生を中心に高校生ライラセミナーに参加します。ロータリークラブやインターアクトクラブとはどういうものか、人と関わりとはどういうことを学びます。ここでも交換留学生が参加しますので、一泊してのセミナーは忘れられないものになります。

また、昨年度は台湾海外研修旅行にも参加することが出来ました。参加するにあたり、中国語での自己紹介や交流先の六信高校の校歌を何度も練習しました。交流会では、日本の伝統文化であり、紙という身近にある材料を使って誰でも遊ぶことのできる「折り紙」を紹介することにしました。比較的簡単で興味を持ってもらえそうな「手裏剣」と「かぶと」を折ることにしましたが、私たちに簡単に出来ても、初めて体験するであろう台湾の生徒たちには難しいということが推察されたので、パワーポイントも使って言葉では足りない説明を補うことにしました。交流会も無事成功し、とても楽しい研修旅行となりました。

これらのインターアクトクラブの活動を通して、言葉は通じなくても伝えたいという気持ちさえあれば必ず伝わるということを実感できました。今後も国際交流に積極的に参加し、日本と外国との掛け橋となるような社会貢献をしていきたいと思えます。



◆足尾植樹◆



◆台湾海外研修旅行◆



▲台北市中正紀念講堂前にて



▲台南の六信高校校庭にて



▲台南駅にて

# 学園告知板

須賀淳 校長先生 執筆

未来を育む「全人教育」私の生きた刻 発行

「私の生きた刻」は下野新聞の土曜日付総合社会面に掲載されている大型企画で、教育・政治・文化・スポーツなど各分野で一代を築いた方々に「わが人生」を語っていただくものです。興味深い読み物であると同時に、栃木県を代表する人物の歴史的資料として、読者からの反響も大きい連載企画です。そのコーナーに、平成二十四年四月から約半年間、本校の須賀淳 校長先生のお話が掲載されました。

今回、その下野新聞に掲載されたものを一冊の本にまとめ、未来を育む「全人教育」私の生きた刻と題し、下野新聞社から発行されました。(定価1,050円)

須賀学園の創立者、須賀栄子先生との寄宿舎での生活や、空襲で全焼した学校の再建に東大の学生と二足のワラジで奔走したエピソード、文部科学省で戦後の教育改革に携わった経緯など、興味深い内容が記述されています。

是非、皆さん手に取って、「全人教育」の見学の精神に触れてみてください。



日本クラシックコンクール(声楽)

第四位入賞!

昨年十二月六日、東京都で開かれた「日本クラシックコンクール(全国大会声楽高校生女子の部)」で本校音楽科の荒川茉捺さん(黒磯中出身)が第四位入賞を果たしました。本大会は九月に関東地区予選、十月に本選、そして今回の全国大会という三段階の審査で、全国大会には四十一名が残りしました。一位から五位の入賞者の中で、荒川さんが唯一の二年生(その他の方は三年生)という快挙でした。

荒川さんは六月に開かれた「第十三回高校生のための歌曲コンクール」でも最高賞の優秀賞を受賞しており、その副賞として機会を与えられた七月末からのイタリア短期留学で実力をつけてきました。これからの更なる活躍が楽しみです。





全国高等学校総合文化祭(長崎大会)

出場決定!



栃木県高校総合文化祭写真展(高校文化連盟主催)の審査が昨年十一月二十八日に行われ、本校写真部は特選二、入選一、佳作四、奨励賞八、合計十五作品の受賞が決まりました。A部門自由で特選の二年生寺田智史君(古里

中学出身)の作品は今年八月に長崎で開かれる第三十七回全国高等学校総合文化祭に出品されます。タイトルは「どお?」という大道芸会の写真です。ピエロの素早い動きにピントを合わせるのが大変だったとのこと。寺田君は、「このパフォーマンズを見てくれ」とピエロが語りかけてくるような写真が撮れました」と笑顔で話してくれました。その他、多くの作品が関東大会への出場を決めています。作品は県総合文化センター第三、四ギャラリーで展示され、好評を得ました。

全国高等学校英語スピーチコンテスト  
関東甲信越  
ブロック大会  
出場決定!

本校普通科一年小倉 旭永さん(宇短附中出身)が、昨年十一月二十一日に行われた第七十一回県内高等学校英語弁論大会県大会において、内容・語法ともトップレベルの各地区代表十五名の中、見事二位に入賞し、全国高等学校英語スピーチコンテスト関東甲信越ブロック大会への出場を決めました。

『いけてる旦那』というタイトルは、ある雑誌で特集されていた「イケダン」いけてる旦那」を題材にしたらおもしろいと思ったからだとか。『当日はとても緊張しました。でも、楽しく、少しでも聴いてくれる方に「イケダン」について理解してもらえたらという気持ちで臨みました。』と話してくれました。

「夢の数だけ夏がある。」  
フレイズ優秀賞に町田君

今夏の第九十五回全国高校野球選手権記念大会のキャッチフレーズコンクール(朝日新聞社、朝日放送主催、日本高野連後援)で一年二組の町田元君の「夢の数だけ夏がある。」が優秀賞に選ばれた。

全国から三、七、七、四、四の応募があり、グラブポイントと優秀賞十点が選ばれた。町田君は、学校の夏休みの課題のひとつとしてキャッチフレーズコンクールの応募を選んだ。

「甲子園に出場するチームもいれば、負けるチームもいる。試合に出られなかった選手もいる。そんな中、選手やチームがそれぞれ夢を抱きながら野球に取り組んでいる。」との思いを込めたという。

産経新聞社主催 第一回 河野裕子短歌賞  
NHK出版賞受賞!

戦後生まれの女流歌人の旗手として活躍した河野裕子氏を折念する記念する「河野裕子短歌賞・青春の歌」で本校一年十組の榎澤広之君がNHK出版賞を受賞しました。



「四、五十度顔を傾げ目に入るほんのちよっぴり君の横顔」という、鮮やかに授業中のひとコマを切り取った歌での受賞でした。また門倉麻依さんの「いつも思う数学得意なああの人の方程式を解いてみたい」、皆川真樹さんの「ふたり乗りあなたと居ればどこまでも行ける気がするの私だけかな」、五関双葉さんの「周りから良い子良い子と育てられどこかで失くしたホントの自分」、武部仁美さん「メガネ掛けレンズ越しに見る君に直に言うなどとてもできない」、一年安納



千晴さんの「赤青緑ドット柄たくさん傘は通るけど私の待ってる傘はない」の五名も入賞となりました。おめでとうございます

### 全国高校生ケータイ韻文コンテスト 団体優秀賞受賞！



本校から百を超える作品を応募した「全国高校生ケータイ韻文コンテスト」。

十一月三日に、千葉県で行われた表彰式には、三年十二組の武藤黎君と一年三組の新井なつみさんが出席。俳句部門の最優秀賞並びに優秀賞という栄えある賞をそれぞれ受賞してまいりました。そのほか、一年の永井アンナさん、畑佐介君、宇藤美月さんの三名も入選を果たしました。皆さん、受賞おめでとうございます！

### 演劇部 県大会出場！



十月二十日・二十一日に行われた「うつのみやジュニア芸術祭学校演劇祭」において、演劇部が優秀賞を受賞し、県大会への出場権を獲得しました。平成十五年以来、九年ぶりの県大会出場を決めました。

演題は「銀河旋律」。タイムトラベルが実現した近未来、過去の改変が問題となっている最中、主人公柿本の過去が改変されています。その過去とは恋人ハルカとの思い出として出会いました。時空を超えて、柿本はハルカとの恋を取り戻すことが出来るのでしょうか？六十分のラブロマンスです。

演劇の舞台と言われても、なじみのない方が多いと思います。テレビドラマや映画と違い、カットやNGは使えません。何が起るかわからない、今、目の前で繰り広げられる劇(ドラマ)に夢中になることうけあいです。

県大会(第三十四回栃木県高等学校総合文化祭演劇研究大会)は十一月二十四日・二十五日に栃木市栃木文化会館において開催され、優良賞および生徒評議員奨励賞をダブル受賞しました。

### 宇都宮中央警察署より 感謝状授与！



昨年六月、本校普通科応用文理コースの岡田駿君(国分寺中出身)と砂川拓也君(氏家中出身)が宇都宮中央警察署署長より感謝状を授与されました。下校途中、目の前で突然倒れたおばあさんを保護し、救急車が到着するまで励まし看病した功績によるものです。二人とも、授与式では緊張した面持ちでした。「目の前でおばあさんが倒れたとき、どうにかしなくては」と思いました。「急だったのでびびりましたが、助けたいと思いました。」と砂川君。救急車が来るまで二人は応答のないおばあさんに対して「大丈夫ですか?」と声を掛け続けました。「早く救急車が来てくれれば」と思いつつ、とても心配でした。」と二人は当時を思い返して話してくれました。幸いおばあさんが無事だったことを知り、二人はほっとした表情を浮かべ、「普段の学校からの指導も一助となった。今後も困った人がいたら助けられる人になりたい。」と力強く話してくれました。

## ◆ ◆ 校 史 と 校 章 ◆ ◆

須賀学園は、昨年11月3日で創立112周年の記念日を迎えましたが、その2年前には創立110周年を記念して式典や演奏会、学校祭、大学祭が開催され、本学園の教育実践の全容を広く内外に示すことができました。

思えば、本学園は、明治33年(1900年)に須賀栄子先生によって創立されました。栄子先生は、女子に最も喫緊な技芸を教授され、その時代と境遇に順応すべき実践的婦人の養成を本学教育の趣旨となし、共和裁縫教習所から明治34年共和裁縫女学校、大正13年宇都宮須賀女学校、昭和7年宇都宮女子高等職業学校と校名を改め、学校を発展させてゆかれました。その後を第2代校長の須賀友正先生が受け継がれ、昭和21年須賀高等女学校、同23年学制改革により宇都宮須賀高等学校と校名変更をし、さらに同42年宇都宮短期大学(音楽科)を新設し、現在の宇都宮短期大学附属高等学校となりました。

その友正先生の後を引き継がれたのが、第3代現校長の須賀淳先生です。先生は、昭和58年宇都宮短期大学附属中学校(中・高6か年一貫教育)を併設され、宇都宮共和大学の開学、宇都宮短期大学の学科増設、須賀学園教育会館および第2グラウンドの新設と、ますます学園を発展させ現在に至っています。

本校の生活目標である「一人は一校を代表する」という言葉(本誌の巻頭を参照)の意味は、本校生徒の一人一人が、それぞれに自らの価値を知り、その価値を自覚して生活することこそ人間の大きな喜びにつながり、幸福への第一歩にもなるというものです。ここには、創立者須賀栄子先生が掲げられた「全人教育」の精神が、100余年かわらずに脈々と生きづいています。

また、現在に至るまで、本校にはいくつかの校章がありましたが、現在の校章は、カタカナの「ス」の文字を3個組み合わせ、図案化した須賀家の合印で、その中央に「高」の文字が挿入されています。(合印とは、昔戦場で敵味方が入り乱れて戦うとき、その背に負って、敵か味方かが見分けられるようにしたものです。)これは、須賀家の家系譜からデザインして第2代校長の須賀友正先生が校章と定められたもので、文字は金色、生地は純白色ですっきりとしており、いかにも清潔な感じのする校章です。現校旗と同じ、昭和34年11月3日に、創立60周年記念事業の一環として制定されました。



県庁de愛ふれあい ハイスクールファッションショー  
24.12.18 -県庁本館ロビー大階段にて- (生活教養科)